

「命を守る」建設産業

建設 論評

「いのちを、守りたい」。ずいぶん印象的なフレーズで始まり、鳩山由紀夫首相の就任後初の施政方針演説が行われた。演説の中でいくたびも語られた「いのち」。無論、この高邁な理念には、誰も反対のしようもない。だが一方で、違和感を持ったのも事実だ。

用を削ったのか理解できない。ハツ場ダムは、利根川下流域の人々を洪水から守り、貴重な上水を確保するためのものではなかったのか。それを中止し、代案は何も示されていない。

厳冬の北海道で、必死でトン

ネルを掘った人々がいる。それができれば、地元の人々が冬場に病院に駆けつけるのもずっと安全になる、そんな思いで従事したはずだ。

山奥のダム現場で不自由な生活をしながら頑張れるのも、人々に安全な水を供給したり、洪水の脅威を減らせる、そこに貢献できるという気持ちを支えている。

「コンクリートから人へ」ではなく、コンクリートと人の調和が必要なのだ。公共工事によって経済活動に寄与するインフラを強化するのも、最終的には人々の生活を守り豊かにするためだ。

建築物だって、技術開発の基軸は常に地震対策だった。さらには防火など、人の安全を守り、安心を提供することに、ずっと努力してきた。

身近なところでは、冬場の降雪地帯で、早朝や深夜でも除雪作業に励む人がいる。大地震のときに救援に駆けつけているのも建設業だ。こうした人々の心に

考えよつによつては、今回の鳩山首相演説は、図らずも建設業界や公共事業の役割を再認識させてくれた。人口減少社会の

到来や、一定程度は整備されたインフラを踏まえ、公共事業も変わらざるを得ない。

それらを認めた上で、建設に関連する人々は、自信と誇りを持って「命を守る公共事業」

「命を守る建設産業」と主張していけばよい。日本のためになすべきことを、建設に携わる立場から、積極的に情報発信していこう。

(新)